

ユトレヒトコーピングリスト19(UCL-19)の信頼性と妥当性

立教大学心理学専攻 西尾温文

The Reliability and Validity of The Utrecht Coping List 19

Nishio Atsufumi (Department of Psychology Rikkyo University in Tokyo, Japan)

The present study was conducted to examine the reliability and validity of the Utrecht Coping List-19 (UCL-19). The Utrecht Coping List (UCL) is a measure of coping. Its reliability and validity have been confirmed (Schreurs et.al 1988). It covers the seven dimensions of coping behavior. UCL-19 is an abbreviated form of the Utrecht Coping List's Original 43 items. Back translation of UCL-19 couldn't be done because it was not possible to contact the author. So psychology researchers and specialists of English language have translated UCL-19 into Japanese and confirmed the validity of the translation. 700 undergraduate students participated the study. By factor analysis, 5 factors were found and factor validity was supported for all items except 9,15 and 16. Items' Cronbach α ranged from .51-.74. So Japanese UCL-19 had low reliability. Japanese UCL-19 was compared with the Tri-Axial Coping Scale (TAC-24) and the concurrent validity was confirmed. UCL-19 has a merit of including the coping response scale of expression of emotion and this scales is important to study female coping style. It was suggested that we should examine the original UCL and the cultural difference to make valid Japanese short form of the measure.

Key words : stress, coping, coping measures,the Utereht coping list19

はじめに

人がストレスフルな状態に遭遇した時の対処の仕方は、コーピングと言われ、1960年代から研究が進められてきた。コーピング及びその測定に関する内外の研究を展望した鈴木・神村(2001)は、ストレスとストレス・コーピングについて以下のように述べている。「ストレスは生体に何らかの不快な緊張を作り出す。そして、我々は、その不快な緊張から解放されることを目的とした行動(認知活動や情動の調整なども含む)をとる。それがストレス・コーピングである。ストレス・コーピングには、性格心理学や健康心理学で広く関心がよせられている。」また、ストレスへのコーピングの柔軟性に富むものは抑うつ傾向が低いこと

が示されており(加藤, 2001)、人間の心理・社会的適応にとって、ストレスへのコーピングが重要である。

ストレスは、セリエ(Selye, 1956)により、「生体内で非特異的に引き起こされたあらゆる変化を含めた特異的な症候群によって表された状態である」と定義された。

この定義に従えば、症候群によって表された状態、つまり、ストレスが作り出す変化なしには、私たちがストレスの状態を評価できないことになる。セリエは、医学的・生物学的問題としてストレスについて論じた。セリエの視点においては、「病気」は「適応メカニズム」であり、外界の侵襲がホメオスタシスという生命体の原則を侵すとすれば、ストレスとは一段と適応的に高め

られたホメオスタシスへの動きということになる(林, 1990). セリエが医学的・生物的概念として開いたストレス概念は, 心理・社会的側面へと適用されていった.

コーピングという言葉は医療や社会科学研究で非公式に使われていたが, 1960年代に, ある一定の適応的防衛機制(たとえば, 理想化やユーモア)を示すものとして使われ始めた. 1960年代と1970年初期のコーピング研究は, 生命を脅かしたりあるいは心的外傷を被ったりした出来事へのコーピング反応の研究にほとんど集中し, 状態変数の研究に偏っていた. 現実的には, 特別にストレスフルな状態に置かれた個人にとって適応できるコーピング戦略は限りなくあったので, 限られた数の基本的なコーピング反応が研究され, まず, 情動中心コーピングと問題中心コーピングの2つが同定された. さらに, 回避優先コーピングが同定され, 多くの研究者の注意を集め続けている. 回避コーピング次元は人間優先そして/あるいは課題優先反応を含んでいるものとして概念化されている(Parker and Endler, 1996).

コーピング研究には二つの立場があると言われている. それは, 「特性」のような性質の重要性を強調する立場と, コーピングを過程としてとらえ状態要素を強調する立場であり, 前者はコーピングの個人内研究, 後者はコーピングの個人内研究と言われている. この二つの立場の違いは, 人間変数と状態変数どちらによってコーピングが決定されるのかの見方の違いである.

過程という観点からすると, 時間を経て, そしてコーピングが起きる状態的文脈とともにコーピングが変わっていくのである(Lazarus, 1993).

Lazarus & Folkmanは, 「コーピングはその結果の如何に関わらず, 求められていることを何とかしようという努力のことを言う」と定義し, 心理的ストレスについては, 「心理的ストレスとは, ある個人の資源に何か重荷を負わせたり, あるいは, それを超えたりするようなものとして, そしてある個人の幸福を脅かすものとして認識された個人と環境との特別な関係である」(Lazarus &

Folkman, 1984)と定義した.

Lazarus (1990)は, 次のように述べている.

ストレスと情動過程のシステム変数図式の媒介過程で一次評価が起き, 続いて二次評価であるコーピング過程が起きることになる. 評価は, 意識的なものにとどまらない. 評価は原始的で, かつ無意識である可能性もある. ストレスは過程としてのものであり, 時間経過のなかで生じてくる心的状態や環境との関係の変化である. 心理的ストレスは, 数多い様々な変数の集積であり, ストレスと情動の問題に関しては, システムティックなアプローチをすべきであり, そのシステムとは多変量的なものである. 研究は, 個人内的であると同時に個人間的であり, また過程に中心を置いたものでなければならない.

本研究においては, Lazarus & Folkman (1984)に従って, コーピングを「その結果の如何に関わらず, 求められていることを何とかしようという努力のこと」と定義し, 心理的ストレスを「ある個人の資源に何か重荷を負わせたり, あるいは, それを超えたりするようなものとして, そしてある個人の幸福を脅かすものとして認識された個人と環境との特別な関係である」と定義する.

問題と目的

コーピングを測定する尺度は, 個人内及び個人内研究ともに自己報告尺度である.

個人内尺度には, 状態-特異尺度 (Situation-Specific Measures) と複合的状態尺度 (Multiple Situation Measures) とがある.

状態-特異尺度はいろいろなタイプの病気や健康問題へのコーピング反応を査定するために開発され, コーピングと健康の関係の研究が盛んになった. McCubbin et. al (1983, 2001)の慢性疾患の子を看病する両親のコーピングと健康質問紙はその一例で, 健康や幸福に影響する心理的, 環境的, 生物的要素の相互関係を統合する部分としてのコーピングを概念化するために多くのモデルが現れた (Lazarus & Folkman, 1984).

また、複合的状態尺度は、様々なストレスフルな状態で使ういくつかの基本的コーピング戦略や反応を査定するために開発された。そこでは、使われる可能性があるあらゆるコーピング行動を査定する項目によって尺度が構成された。回答者は最近のストレスフルなできごとを同定し、そのできごとについて述べられているコーピング項目に回答する。この尺度としては、68項目からなる Ways of Coping Checklist (WCC; Folkman & Lazarus, 1980) が最も大きな影響を与えた。

日下部ら (2000) は、内外のコーピングの測定と尺度開発に関する論文を展望し、内外ともに引用されるコーピング尺度の中で最も多かったものは、Lazarus & Folkman (1984) による WCC であると述べている。しかし、WCC は、問題中心型コーピング (problem focused coping)、情動中心型コーピング (emotion focused coping) という 2 つの基本的コーピング戦略を査定するものだが、因子分析を行った所、7 因子が見いだされ (Aldwin, Folkman, Shaefer, Coyne, and Lazarus, 1980)、また、WCC の併存的妥当性の研究からも WCC の妥当性に疑問が投げかけられた。そこで、Folkman & Lazarus (1985) は WCC を修正し 66 項目からなる the Ways of Coping Questionnaire (WCQ) を作り、8 因子を見だし、1988 年に 16 の中性項目を加え WCQ test manual を作成した。古川 (1993, 2001) は、WCC の因子の安定性と概念妥当性、revised WCC の信頼性、日本語版 WCC の原版との意味等価性、日本語版の信頼性と妥当性、WCQ の因子構造そのもの、すべてに疑問を呈した。

本邦において、WCC の次に引用が多い SCS (坂田, 1989) は、コーピングを心理的ストレス反応の低減を目的とした行動であると簡潔に定義し、多様なコーピング過程を明らかにするために開発された 19 下位尺度を持つ 58 項目の 2 件法質問紙である。信頼性はアルファ係数と I-T 相関で確認されているが、妥当性が確かめられていない。

一方、個人間尺度としては、Endler と Parker (1990) による CISS (The Coping Inventory for

Stressful Situations) が代表とされる。CISS は、3 つの基本的次元；課題優先型コーピング (task-oriented coping)、情動優先型コーピング (emotion-oriented coping)、回避優先型 (avoidance-oriented coping) を査定する個人間コーピング尺度である。3 つの基本的次元を査定するが、実際のコーピングの複雑さや異質さを反映するには範囲が狭く、個人や状態全域での安定性を維持したままで、コーピング戦略の第 2 グループを同定するためにより詳述の必要がある (Schwarzer, R. and Schwarzer, C. 1996)。

WCC, SCS, CISS いずれも上述した欠点があるため、本研究では、欧米において信頼性と妥当性が確立しており (Schreurs et al., 1988; Sanderman, 1988)、内容的妥当性が高いと判断したユトレヒト・コーピング・リスト、Utrecht Coping List (以下、UCL) をコーピング尺度として検討した。UCL は Hoekstra-Weebers, Jaspers, Kamps and Klip (1998) が小児のがん患児の両親の心理的適応とコーピングにおけるジェンダー差を調査した研究で、コーピング尺度として用いられた。

UCL は、以下の 7 次元コーピング尺度からなる。

- 1 : active-problem focusing (積極的問題中心；以降、問題中心と略記する)：落ち着いてあらゆる角度から状況を見る；問題を整理する；問題を目的と自信を持って解決し始める
- 2 : palliative reaction pattern (気晴らし反応；気晴らし)；気晴らしを求めたり問題を考えないですむように他のことをして過ごす；リラックスしたりタバコを吸ったり酒を飲んだりして楽になろうとする
- 3 : avoidance behavior (回避行動)：なりゆきに任せる；状況を避けるかもしくは事の成り行きを見守る
- 4 : social-support seeking (ソーシャルサポート希求；サポート)：他の人からの同情や理解を得ようとする；別の人と不安を分かちあったり、助けを求めたりする

- 5 : passive reaction pattern (受動反応) : 問題や状況に自分をまるごと陥ったままにする ; いらいらして自分の殻に閉じこもり, 状況について何もすることができない ; 過去にいらだつ
- 6 : expression of emotions (感情表出) : いらだたしさを怒りを表す ; 緊張を徐々にほぐす
- 7 : comforting cognitions (慰め認知) : ものごとは段々良くなるという考えで自分自身を慰める ; 自分以外の人も困難を抱えているとかもっと悪いことだって起きると考えることで自分を慰める

以上のUCLの7次元コーピング尺度は内容的妥当性が高いと判断した。ただし, UCLは43項目と項目数が多く, 被検者の負担が大きいと考えられたため, UCLの短縮版であるUCL-19の方が実用性が高いと考えた。UCL-19は, Huizink, Robles de Medina, Mulder, Visser and Buitelaar (2002) が, 通常の妊娠におけるコーピング (Coping in Normal Pregnancy) の研究で用いたものである。UCL-19は, 問題中心, 気晴らし, 回避行動, サポート, 受動反応, 感情表出, 慰め認知の7次元のうち, 問題中心, 気晴らし, 回避行動, サポート, 受動反応, 感情表出の6次元コーピング尺度を含む尺度である。

本研究は, UCL-19の信頼性と妥当性を調べることを目的とする。

方 法

尺度

UCL-19 UCL-19を以下の手続きで日本語に翻訳した。まず, 西尾がUCL-19を日本語に翻訳したものを, 4人の英語専門家が独立に検討した。この検討結果を踏まえて, 西尾と, もう一人の心理学者が, 翻訳を改訂した。この改訂版のUCL-19の翻訳を, 先の4人とは異なる, 英語を母国語とし日本語にも精通している語学の専門家が検討し, さらに改訂したものをUCL-19の日本語訳とした。ただし, UCL原著者との接触が不可能であったために, 日本語訳の妥当性の確認を原著者

との間で行なうことはできなかった。

内容的妥当性を検討した結果, 確定したUCL-19の項目をTable 1に示した。また, UCL-19の回答はLikert4件法による。

TAC-24 次に, UCL-19の併存的妥当性を検討するために, 三次元モデルにもとづく対処方略尺度 (Tri-Axial Coping Scale; TAC-24; 神村・海老原・佐藤・戸ヶ崎・坂野1995) を用いた。

TAC-24は, 対処方略の分類の次元として, ①「問題焦点-情動焦点」軸, つまり「ねらいとしているのは具体的問題解決か, あるいは情動調整か」の軸, ②「接近-回避」軸, つまり「積極的に関わる態度か-回避あるいは無視して距離をおこうとする態度か」の軸, および, ③「反応系」軸, つまり「機能は認知系か行動系か」の軸の3軸で構成される8空間 (象限) のそれぞれに対応した対処方略の8尺度24項目からなる個人差を測定するコーピング尺度である。各項目への回答は

Table 1 UCL-19の項目

1 : あなたは自分の欲求不満をあらわにしますか
2 : あなたは問題の責任があると考える人に怒りを表しますか
3 : あなたは面倒な状況になるよりは周囲に従いますか
4 : あなたは事の成り行きをそのままがまんして受け入れますか
5 : あなたは誰かと心配事を分かち合いますか
6 : あなたはトラブルがあった時にすぐに行動を起こしますか
7 : あなたはちょっと出かけて悩みを忘れようとしていますか
8 : あなたは気晴らしを求めますか
9 : あなたは心の中で悩みごとについてあれこれ考えますか
10 : あなたはできるだけ困難な状況を避けますか
11 : あなたは問題を解決するために色々な解決方法を考えますか
12 : あなたは問題を解決するために, その目標を達成することのみ考えて行動しますか
13 : あなたは誰かに助けを求めますか
14 : あなたは最初に問題を整理しますか
15 : あなたは問題と関係ないその他の事について考えますか
16 : あなたは何となくより満足な気持ちを感じようとしていますか
17 : あなたは感情をあらわにしますか
18 : あなたは慰めと同情を求めますか
19 : あなたは何か困っていることをあらわにしますか

Likert 5 件法であり、因子分析（斜交解）により 8 因子が得られている。8 因子は、情報収集（関与－問題焦点－行動）、放棄・諦め（回避－問題焦点－認知）、肯定的解釈（関与－情動焦点－認知）、計画立案（関与－問題焦点－認知）、回避的思考（回避－情動焦点－認知）、気晴らし（回避－問題焦点－行動）、カタルシス（関与－情動焦点－行動）、責任転嫁（回避－問題焦点－行動）である。また、2 次因子分析により、情報収集、計画立案、カタルシスが高く負荷する問題解決・サポート希求因子、放棄・諦め、責任転嫁が高く負荷する問題回避因子、回避的思考、肯定的解釈、気晴らしが高く負荷する肯定的解釈と気そらし因子の 3 つの背後因子が見いだされた（神村・海老原・佐藤・戸ヶ崎・坂野1995）。

さらに、ストレス対処機能が 3 軸で説明されること及び 3 軸が方向軸（1995 表記では接近－回避軸、以下同様）→焦点軸（問題焦点－情動焦点軸）→表出軸（反応系軸）の階層構造を持つことが共分散構造分析によって確認されている（鈴木・嶋田・神村, 2000）。

TAC-24 の項目を Table 2 に示す。TAC-24 の回答は Likert 5 法による。

被験者

2003 年 5 月に関東地方の私立大学の学部学生を対象に質問紙調査を実施した。回答数は $n=719$ 人（男 282, 女 437）、UCL-19 の有効回答数は $n=700$ 人（男 271, 女 429）であった。700 人の年齢は平均 19.8 歳、 $SD=2.27$ 、男性は平均=19.9 歳、 $SD=1.42$ 、女性は平均=19.6 歳、 $SD=2.67$ であった。

手続き

研究趣旨を口頭で説明し、協力の同意を得た上で UCL-19・TAC-24 から構成される質問紙への記入を求め、その場で回収した。

結 果

信頼性と因子妥当性

UCL-19 に関して、因子分析を行った。19 項目に対する回答をもとに、SPSS 11.0J for Win-

Table 2 TAC-24 の項目

1: 悪いことばかりではないと楽観的に考える
2: 誰かに話を聞いてもらい気を静めようとする
3: 嫌なことを頭に浮かべないようにする
4: スポーツや旅行などを楽しむ
5: 原因を検討しどのようにしていくべきか考える
6: 力のある人に教えを受けて解決しようとする
7: どうすることもできないと解決を後延ばしにする
8: 自分は悪くないと言い逃れをする
9: 今後はよいこともあるだろうと考える
10: 誰かに話を聞いてもらって冷静さを取り戻す
11: そのことをあまり考えないようにする
12: 買い物や賭事、おしゃべりなどで時間をつぶす
13: どのような対策をとるべきか綿密に考える
14: 詳しい人から自分に必要な情報を収集する
15: 自分では手に負えないと考え放棄する
16: 責任を他の人に押しつける
17: 悪い面ばかりでなくよい面を見つけていく
18: 誰かに愚痴をこぼして気持ちをほらす
19: 無理にでも忘れるようにする
20: 友だちとお酒を飲んだり好物を食べたりする
21: 過ぎたことの反省をふまえて次にすべきことを考える
22: 既に経験した人から話を聞いて参考にする
23: 対処できない問題だと考え、諦める
24: 口からでまかせを言って逃げ出す

dows を用いて主因子法による因子分析を行い、回転のない因子解、Varimax（直交解）、プロマックス解（斜交解）を求めた。斜交解で、構成概念の検討に最も妥当な因子構造が得られたので、斜交解を採用した。その結果を Table 3 に示す。因子間相関マトリックスを Table 4 に示す。UCL-19 の各項目を UCL-項目番号で表す。

Table 3 で斜交回転により抽出した 5 因子はすべて固有値が 1 以上、説明する分散の比率は、全分散の 51%、各因子における内的整合性を示す α 係数は、.51-.74 であった。項目 9 の因子負荷量が .2 より小、項目 15, 16 の因子負荷量が .3 より小と、いずれも因子負荷量が低いことが示された。

因子相関については、サポート、感情表出、気晴らしの間には中程度の正の相関、回避行動は感

情表出、問題中心と低い負の相関、問題中心は気晴らしと低い正の相関があった (Table 4)。次に、回答全体への因子分析と共に、ジェンダー別に因子分析を行った。ジェンダー別の因子分析も全体への因子分析と同じ方法を用い、因子数は固有値が1.0以上であることを基準とした。男性の因子分析結果をTable 5に、女性の因子分析結果をTable 6に示す。

男性について、項目9は、いずれの因子にも.2

Table 3 UCL-19因子負荷量 (全体)

	サポート	感情表出	回避行動	気晴らし	問題中心
α 係数	.739	.658	.635	.507	.546
UCL13	.824	-.024	-.044	-.017	-.075
UCL 5	.728	-.168	-.130	.033	.094
UCL19	.548	.267	.042	-.024	-.048
UCL18	.452	.067	.229	.042	-.012
UCL 1	-.045	.708	.102	.020	-.038
UCL17	.092	.677	-.067	-.044	.063
UCL 2	-.047	.504	-.092	-.029	.057
UCL 3	.019	-.026	.759	.012	.008
UCL 4	.040	-.165	.612	-.063	.042
UCL10	-.058	.127	.467	.058	.028
UCL 8	-.050	.054	.023	.811	-.096
UCL 7	.064	-.084	-.088	.555	-.053
UCL16	.081	.015	.077	.276	.199
UCL15	-.030	-.040	.040	.207	.103
UCL11	-.023	-.027	.031	.083	.707
UCL14	-.057	-.025	.003	-.027	.534
UCL12	.030	.093	.076	-.084	.390
UCL 6	.029	.066	-.234	.052	.387
UCL 9	.071	.027	.132	.156	.173
固有値	3.423	2.170	1.721	1.276	1.204
寄与率	18.015	11.422	9.059	6.713	6.336
累積寄与率	18.015	29.437	38.496	45.209	51.546

Table 4 因子毎の因子間相関マトリックス

因子	サポート	感情表出	回避行動	気晴らし	問題中心
サポート	1.000				
感情表出	.484	1.000			
回避行動	.014	-.237	1.000		
気晴らし	.372	.315	-.028	1.000	
問題中心	.160	.149	-.305	.286	1.000

より低い負荷量しか示さなかった。項目16, 18, 19がそれぞれ2因子へ.2より大きい負荷量を示した。また、項目15が独自因子となった。内的整合性を示す α 係数は.56-.74であった (Table 5)。

女性について、項目16, 18, 19が、それぞれ2因子へ.2より大きい負荷量を示した。また、項目15が独自因子となった。内的整合性を示す α 係数は.60-.72であった (Table 6)。

因子を構成する項目は、男性と女性で共通であったものが以下のように見られた。サポート因子の項目5, 13, 18, 19, 感情表出因子の項目1, 2, 17, 回避行動因子の項目3, 4, 10, 問題中心因子の項目6, 11, 12, 14, 気晴らし因子の項目7, 8である (Table 5, 6)。

併存的妥当性

UCL-19の併存的妥当性を検討するため、UCL-19の19項目とTAC24の24項目を一括して因子分析を行なった。全回答からUCL-19とTAC-24の

Table 5 UCL-19因子負荷量 (男性)

	サポート	感情表出	回避行動	問題中心	気晴らし	
α 係数	.740	.690	.630	.570	.560	
UCL13	.811	.028	-.063	-.069	-.045	-.091
UCL 5	.638	-.107	-.171	.079	.014	-.064
UCL18	.551	-.029	.221	-.078	.152	.032
UCL19	.536	.237	.054	-.008	-.041	.130
UCL17	.064	.768	-.037	.062	-.051	.048
UCL 1	-.077	.706	.102	-.063	.053	-.065
UCL 2	.091	.455	-.102	.104	-.038	-.043
UCL 3	.004	-.076	.710	.045	-.035	-.053
UCL 4	.052	-.107	.591	.023	-.093	.015
UCL10	-.133	.221	.525	-.051	.066	-.013
UCL 9	.113	-.009	.182	.139	.179	.121
UCL14	-.003	-.019	.026	.637	-.148	.026
UCL11	-.020	.002	.049	.606	.057	.124
UCL 6	-.022	.050	-.226	.416	.112	-.022
UCL12	-.034	.086	.031	.330	.016	-.172
UCL 8	-.039	.045	-.025	-.085	.731	-.006
UCL 7	.038	-.034	-.135	-.101	.494	.109
UCL16	.045	-.057	.075	.242	.455	-.129
UCL15	-.050	-.042	-.041	.011	.019	.706
固有値	3.38	2.24	1.62	1.39	1.24	1.11
寄与率	17.81	11.81	8.50	7.31	6.54	5.86
累積寄与率	17.81	29.62	38.12	45.43	51.97	57.83

両回答の欠損値がないものは675回答であった。
($n=675$, $M=19.77$, $SD=2.30$, 男性： $n=262$,
女性： $n=413$)

UCL-19の19項目, TAC-24の24項目の得点を
もとに因子分析(主因子解), 斜交解(プロマッ
クス回転)を求めた。固有値の大きさが1.0以上
であることを基準として, 11因子を抽出した。因
子負荷量行列をTable 7に示し, 因子間相関マト
リックスをTable 8に示す。TAC-24の各項目を
TAC-項目番号で表す。

Table 7から, 第11因子までが固有値1.0以上
であり, 11因子により説明される全分散に対する
比率は60.8%だった。TAC-24は, 責任転嫁と放棄・諦
めの項目がここでは第2因子として同一因子
を構成していたが, それ以外の項目は因子ごと
に分かれた。そこで, Table 7はTACとUCL両
方の項目が含まれるものはTACの因子名とUCL
の因子分析によって得られた因子名で命名し,

Table 6 UCL-19因子負荷量(女性)

	サポート	回避行動	感情表出	問題中心	気晴らし	
α 係数	.720	.640	.640	.600	.640	
UCL13	.843	.016	-.051	-.060	.073	-.123
UCL 5	.751	-.082	-.192	.138	.064	-.035
UCL19	.588	.009	.274	-.122	-.064	.066
UCL18	.323	.219	.135	.026	-.108	.181
UCL 3	.005	.783	-.005	-.016	.023	.055
UCL 4	.061	.585	-.235	.002	-.071	.052
UCL10	-.014	.494	.091	.136	.093	-.141
UCL 1	-.023	.083	.684	-.028	.049	-.002
UCL17	.110	-.150	.588	.009	-.050	.092
UCL 2	-.104	-.050	.557	.091	.026	-.126
UCL11	-.048	.003	-.027	.745	.037	-.064
UCL12	.045	.196	.143	.556	-.086	-.158
UCL14	-.054	-.036	-.061	.440	.003	.110
UCL 6	.145	-.296	.022	.315	.002	.074
UCL 8	.001	.071	.074	-.077	.890	.053
UCL 7	.058	-.012	-.038	.046	.518	-.026
UCL15	-.058	-.083	-.080	-.032	.020	.631
UCL 9	-.036	.046	.052	.190	.001	.251
UCL16	.038	.066	.027	.207	.133	.207
固有値	3.47	2.13	1.82	1.31	1.16	1.13
寄与率	18.26	11.22	9.59	6.89	6.11	5.96
累積寄与率	18.26	29.48	39.07	45.96	52.07	58.04

TAC及びUCLのみの項目で構成された因子につ
いては, TAC及びUCLの因子名を用いて命名し
た。第10因子は, UCL 9「あなたは心の中で悩
み事についてあれこれ考えますか」, UCL15「あ
なたは問題と関係ないその他のことについて考え
ますか」, UCL16「あなたは何とかしてより満足
な気持ちを感じようと思えますか」が独自の因子を
構成していた。この因子は, 内容から「受動的気
晴らし因子」と命名した。

UCLの感情表出と回避行動を表す全項目及び
問題中心のUCL 9と気晴らしのUCL15, 16が
TAC各項目とは異なる因子を構成していた。ま
た, UCL13は問題中心因子に, UCL 6は計画立
案と問題中心因子にそれぞれ低い因子負荷量を
示した。UCL-19の因子分析で因子負荷量の低か
ったUCL 9, 15, 16が独自に第11因子を構成し
ていた。(Table 7)

TACの各項目は, 責任転嫁と放棄・諦めが同
一の因子を構成し, TAC21が情報収集因子に,
TAC 6がカタルシス&サポート因子への低い因
子負荷量を示す他は, 互いに独立した因子を構成
していた(Table 7)。

因子間に.3から.7の中程度の正の相関がみ
られたものは, 以下の通りである。カタルシス&サ
ポートと気晴らし(.35), カタルシス&サポート
と情報収集(.42), カタルシス&サポートと感情
表出(.48), カタルシス&サポートと受動的気晴
らし(.38), 責任転嫁&放棄・諦めと回避的思考
(.37), 責任転嫁&放棄・諦めと回避行動(.37),
計画立案&問題中心と情報収集(.41), 肯定的
解釈と気晴らし(.35), 感情表出と受動的気晴
らし(.34)。また, 因子間に-.7~-0.3の中程度の
負の相関がみられたものは, 責任転嫁&放棄・諦
めと計画立案&問題中心(-.37)であった(Table
8)。

また, UCL-19とTAC-24とをそれぞれに因子
分析し, 因子毎にPearsonの相関係数を求めた。
1%水準で有意差が見られたのは, UCL(サポー
ト)-TAC(カタルシス):.67, UCL(問題中心)
-TAC(計画立案):.51, UCL(気晴らし)-

Table 7 UCL-19とTAC-24各項目の因子負荷量

	カタリス責任転嫁&計画立案& &サポート放棄・諦め問題中心	肯定的解釈	気晴らし	回避的思考	情報収集	感情表出	回避行動	受動的 気晴らし	問題中心		
TAC 2	.915	-.093	.024	-.010	.008	.025	-.027	-.032	-.011	-.025	-.135
TAC10	.820	-.096	.026	.027	.041	.039	-.024	.006	-.093	-.030	-.165
UCL13	.751	-.024	-.019	-.046	-.014	.033	.089	-.024	.056	-.104	.253
UCL 5	.714	-.065	.103	.020	.096	-.011	.011	-.119	-.014	-.073	.148
TAC18	.597	.081	-.017	-.008	.112	-.029	-.004	.127	.007	-.019	-.224
UCL19	.469	.172	-.056	.017	-.175	-.043	.091	.194	-.029	.085	.161
UCL18	.389	.196	-.025	.048	-.155	-.030	.013	-.023	.092	.238	.031
TAC16	-.018	.876	.114	.044	.061	-.141	-.079	.034	-.053	-.084	.030
TAC23	-.006	.741	.007	-.025	-.035	.129	.040	-.065	.006	-.027	.022
TAC24	-.004	.728	.097	-.077	.051	.017	-.042	-.018	-.009	-.057	.039
TAC15	-.079	.687	-.079	-.011	.034	.133	.084	-.042	-.037	.017	-.026
TAC 8	.054	.659	.016	.069	.063	-.096	-.037	.068	-.022	.053	-.052
TAC 7	-.069	.483	-.150	.108	-.006	.052	.024	.001	.108	.118	-.206
TAC13	-.041	.113	.723	-.093	-.036	.007	.159	.021	.006	.032	-.170
TAC 5	.055	-.020	.665	.045	-.088	-.044	.103	-.045	.052	-.001	-.027
UCL14	.028	-.035	.633	-.058	-.059	.088	-.117	-.026	-.019	.036	.070
UCL11	.021	-.046	.605	.040	.074	-.020	-.095	-.028	-.004	.176	.112
UCL12	.034	.147	.517	-.033	-.001	.094	-.090	.064	.083	-.123	.199
TAC21	-.051	-.103	.343	.196	.017	.070	.304	.005	-.028	-.047	-.140
TAC 1	.019	-.021	-.034	.795	-.011	.118	-.120	.033	.024	.029	.055
TAC 9	.044	.081	-.042	.786	.042	-.013	-.047	-.029	-.003	.108	-.043
TAC17	-.051	-.017	.018	.622	-.018	.013	.090	-.048	.007	.044	.008
TAC 4	-.131	.133	.034	.124	.595	-.181	.056	.006	-.008	-.196	.101
TAC12	.258	.151	-.070	-.025	.570	.059	-.135	-.097	.019	-.072	-.075
TAC20	.099	.024	-.091	-.020	.527	.025	.121	.070	.039	-.103	-.158
UCL 7	-.004	-.105	.020	-.087	.515	.117	-.015	-.058	-.016	.279	.110
UCL 8	-.082	-.077	-.046	-.013	.421	.048	.079	.085	.035	.417	.040
TAC 3	.088	-.038	.163	.139	-.048	.729	-.065	.044	.040	-.069	.062
TAC11	-.043	-.008	-.053	.034	.050	.724	.023	.023	-.046	-.030	-.042
TAC19	-.013	.243	.025	-.094	-.047	.511	.088	-.074	-.095	.089	-.065
TAC14	-.002	.006	.041	-.071	.007	-.026	.748	-.010	-.010	.060	.017
TAC22	.087	-.062	-.030	-.011	.053	.050	.692	.020	.014	-.022	-.031
TAC 6	.254	.089	-.099	.006	-.014	-.041	.523	-.023	.042	.023	.183
UCL 1	-.053	-.031	-.026	-.062	-.013	.074	-.006	.769	.091	-.021	-.045
UCL17	.110	-.063	-.027	.058	-.042	-.014	-.017	.660	-.072	.000	.055
UCL 2	-.047	.065	.063	-.028	.037	-.047	.020	.502	-.091	-.086	.055
UCL 3	-.019	-.069	-.020	.050	.033	-.079	.024	.028	.825	-.040	-.059
UCL 4	.014	-.032	.037	.017	-.011	-.076	.026	-.140	.668	-.098	-.004
UCL10	-.056	.111	.151	-.086	.032	.194	-.058	.113	.455	-.026	.022
UCL 9	.084	.027	.135	-.093	-.028	-.241	-.093	.004	.007	.461	-.196
UCL15	-.097	-.025	-.025	.094	-.102	.018	.026	-.065	-.097	.449	-.051
UCL16	-.009	.037	.105	.169	.059	-.013	.080	.001	.002	.349	-.001
UCL 6	-.021	-.113	.290	.070	.146	-.083	.071	.098	-.133	-.060	.291
固有値	6.136	4.971	2.929	2.433	2.046	1.536	1.456	1.332	1.195	1.085	1.019
寄与率	14.270	11.561	6.812	5.658	4.758	3.572	3.385	3.099	2.780	2.524	2.369
累積寄与率	14.270	25.831	32.643	38.301	43.059	46.630	50.015	53.114	55.894	58.418	60.787

Table 8 UCL-19とTAC-24各項目の因子間相関マトリックス

因子	カタルシス責任転嫁&計画立案&サポート放棄・諦め問題中心	肯定的解釈	気晴らし	回避的思考	情報収集	感情表出	回避行動	受動的気晴らし	問題中心		
カタルシス &サポート &責任転嫁 &放棄・諦め 計画立案& 問題中心	1.000										
肯定的 解釈	.151	1.000									
気晴らし	.050	-.366	1.000								
回避的 思考	.111	-.080	.243	1.000							
情報収集	.350	.041	.031	.351	1.000						
感情表出	.041	.370	-.249	.243	.287	1.000					
回避行動	.421	.111	.411	.237	.258	-.003	1.000				
受動的 気晴らし	.481	.186	.104	.033	.224	.007	.214	1.000			
問題中心	.037	.375	-.286	-.173	-.077	.196	-.016	-.204	1.000		
	.381	.134	.126	-.035	.204	.072	.208	.342	.200	1.000	
	.085	.033	-.072	-.050	-.013	.008	-.075	.244	-.095	.279	1.000

TAC（気晴らし）：.36であり、いずれも中程度の相関が得られた。

考 察

信頼性と因子妥当性

信頼性が高いと判断するためには、 α 係数は.7以上であることが必要であるとされている。 α 係数は、サポートが.7より大であり、UCL-19のサポートは内的整合性が高い因子であることが示されたが、その他の因子は、全体で.51～.66であり、信頼性が低かった。信頼性については、今後、さらに検討を進める必要がある。

UCL-19の因子構造は、サポート、感情表出、気晴らし、回避行動、問題中心の5因子構造と考えられた（Table 3, 5, 6）が、以下のような問題があることが示された。

UCL-19の全体に対する因子分析の結果、因子負荷量が.3に満たなかった項目9, 15, 16について考察する。項目9は、男性では因子負荷量が.2未満、女性では.3未満であった。これは、項目9「あなたは心の中で悩みごとについてあれこれ考えますか」の「あれこれ考える」という行動が、くよくよ考えるという受動反応である場合と、問題を解決しようとする積極的な努力である場合と、気晴らしとして様々なことを考える場合などのいずれにもあてはまり、多義的であったからで

あると考える。項目15「あなたは問題と関係ないその他の事について考えますか」は、男性、女性ともに独自の因子として抽出された。この項目は、内容から、「受動的気晴らし因子」と命名した。項目16は、男性においては気晴らしに対する因子負荷量が.45、問題中心に対する因子負荷量が.24で、女性においては気晴らし・問題中心に対する因子負荷量が.3未満であった。これは、項目16の「あなたは何かしてより満足な気持ちを感じようと思えますか」が男性・女性ともに、遭遇するストレスフルな状況によっては満足な気持ちを感じることで解決が促されるからだと考えられる。

これらの項目15, 16の受動的気晴らし因子が独自の因子として抽出されたことは、日本人の特徴を表している可能性も考えられる。

UCL-19は、サポート、感情表出、回避行動、気晴らし、問題中心という5尺度のコーピング尺度と考えられたが、尺度の妥当性には項目9, 15, 16において問題があることが示唆された。これらの問題点をふまえ、日本とオランダとの文化の相違を考慮しつつ、日本語版の質問項目の内容妥当性の再検討が必要である。

因子相関からは、サポート、感情表出、気晴らしの間の相関が比較的高く、内容から、これらは情動中心型のコーピングを構成していると考えられた。問題中心は問題中心型コーピングを、回避

行動は回避型コーピングに対応しているといえよう。

併存妥当性

UCL-19の19項目とTAC-24の24項目を同時に因子分析した結果、Table 7より、TACの各項目は、責任転嫁と放棄・諦めが同一の因子を構成し、TAC21とTAC 6が他の因子に低い因子負荷量を示した他は、互いに独立した因子を構成していた。UCLの各項目は、感情表出と回避行動を表す全項目及び問題中心のUCL 6, 9, 気晴らしのUCL15, 16がTAC各項目とは異なる因子を構成し、UCLのサポート全項目がTACのカタルシスと、UCLの気晴らし4項目中2項目がTACの気晴らしと、UCLの問題中心5項目中3項目がTACの計画立案と同じ因子を構成していた。

UCL 5尺度とTAC 8尺度とにおいて、UCLのサポートがTACのカタルシスと、UCLの問題中心がTACの計画立案と、UCLの気晴らしがTACの気晴らしとそれぞれ同じ因子を構成していたことは、内容からみて併存的妥当性を支持する結果である。また、UCLの感情表出、回避行動の各項目が他の因子に高い因子負荷量を有していないことは、感情表出と回避行動がUCL独自の尺度であるからだと考えられる。感情表出と回避行動は、Lazarus & Folkmanのコーピングの定義にある「努力」以前の感情や欲求の表出または遭遇した状況への追従、忍従、回避という回避行動である。このため、「情緒と環境の調整を意図した認知的・行動的試み」という定義に合致したTAC-24の尺度への高い因子負荷が見られなかったのだと考える。

第1因子：カタルシス&サポート因子のUCL 13は第11因子：問題中心因子へ.25の低い因子負荷量を示した。これは、UCL13が「あなたは誰かに助けを求めますか」というサポート希求であり、第11因子の単独項目であるUCL 6の「あなたはトラブルがあった時にすぐに行動を起こしますか」のすぐ起こす行動に含まれる概念だからだと考えられる。

また、UCL 6は単独で因子を構成し第3因子：

計画立案&問題中心因子へ.29の低い因子負荷量を示した。これは、UCL 6のすぐ起こす行動が、問題解決行動に特定されないからだと考えられる。

一方、気晴らしの項目であるUCL 7, 8は第10因子：受動的気晴らし因子に対して負荷が見られた。これは、これらの項目の併存妥当性を支持する結果である。

UCL-19は、問題焦点型コーピングの4尺度と情動焦点型コーピングの4尺度からなるTAC-24に対して以下の下位尺度の妥当性が確認された。問題焦点型コーピング尺度は、UCLの問題中心がTACの計画立案と、情動焦点型コーピング尺度は、UCLのサポートがTACのカタルシスと、UCLの気晴らしがTACの気晴らしとそれぞれ同じ尺度であると考えられた。

次にTable 8の因子間相関マトリックスで見られた因子間相関について考察する。コーピング因子間の相関が高いことは、あるコーピングが他のコーピングを促進したり・促進されたりという相互作用の関係がある可能性を示唆している。ここで、UCLとTACとの因子相関に注目すると、UCLのサポート、TACのカタルシスからなる第1因子がTACの情報収集からなる第7因子に中程度の正の相関を示したのは、情報が得られて気持ちが落ち着いたり、サポートを求めた結果情報が得られたりという相互作用がある可能性を示唆している。また、UCLの回避行動からなる第9因子が、TACの責任転嫁、放棄・諦めからなる第2因子と弱い正の相関を示したのは、回避型コーピングの回避行動が結果として責任転嫁、放棄・諦めになったり、逆に責任転嫁、放棄・諦めの問題中心型コーピングが回避行動として現れたりする可能性を示唆している。

UCL-19は、サポート・感情表出・回避行動・気晴らし・問題中心の5尺度のうち、サポート・問題中心・気晴らしの3尺度がTAC-24との併存的妥当性を有し、感情表出・回避行動の2尺度がTAC-24とは独立の尺度であると結論される。

まとめ

UCL-19は、いくつかの項目に、意味の多義性

によると思われる妥当性の問題があることが明らかになった。また、 α 係数で検討した信頼性は低かった。再検査信頼性の検討は今後の課題である。一方、TAC-24というすでに確立されているコーピング尺度との併存的妥当性は、5つの下位尺度のうち、3尺度について確認された。

おわりに

本研究ではコーピングの定義をLazarus & Folkmanの「コーピングはその結果の如何に関わらず、求められていることを何とかしようという努力のこと」とした、UCL-19が「…とかがしよとうとする努力」以前のコーピング反応である感情表出と回避行動という尺度を持っていることが確認された。サポート尺度項目の中に感情表出や回避行動尺度にも相関している項目があり、このことはサポートというコーピング行動の多義性を意味するとともに、コーピングの相互作用の可能性を示唆していると思われた。同時にコーピング行動を概念化する場合の困難さとも考えられる。

また、Stanton, Danoff-Burg, Cameron and Ellis (1994) は、感情表現を通したコーピングが女性に有益であり、男性にはむしろ害をもたらすことを示唆している。従って、感情表出を尺度として含むUCL-19は、感情表現と適応の問題と感情表現におけるジェンダー差を検討する上で有効であると思われる。コーピングの基本的次元として、問題中心型、情動中心型、回避優先型が考えられているが、感情表出と回避行動というコーピング反応も含めたコーピング尺度であるUCL-19の元になっているUCLを検討し、UCL-19で妥当性の低かった項目を削除しそれに代わる妥当な項目を入れたUCL日本簡便版を作ることが今後の課題である。

引用文献

Aldwin, C., Folkman, S., Shaefer, C., Coyne, J., & Lazarus, R. 1980 Ways of Coping Checklist : A process measure. *Paper presented at the American Psychological Association Annual*

Convention. Montreal, Canada.

Endler, N.S., James, F.R.S.C., & Parker, D.A. 1999 CISS Manual 2nd edition. Multi-Health Systems Inc.

Folkman, S., & Lazarus, R.S. 1980 An analysis of coping in a middle-aged community sample. *Journal of Health and Social Behavior*, **21**, 219-239.

Folkman, S., & Lazarus, R.S. 1985 If it changes it must be a process: A study of emotion and coping during three stages of college examination. *Journal of Personality and Social Psychology*, **48**, 150-170.

古川壽亮 2001 心理アセスメントブック 第2版 西村書店

古川壽亮・鈴木ありさ・斉藤由美・濱中淑彦 1993 CISS (Coping Inventory for Stressful Situations) 日本語版の信頼性と妥当性：対処行動の比較文化的研究への一寄与 *精神神経学雑誌*, **95**, 602-621.

Huizink, A.C., Robles de Medina, P.G. Mulder, E.J.H., Visser, G.H.A., & Buitelaar, J.K. 2002 Coping in Normal Pregnancy. *The Society of Behavioral Medicine*, **24**, 132-140.

Josette E.H.M., Hoekstra-Weebers, J.E.H.M., Jaspers, J.P.C., & Klip, E.D.C. 1998 Gender differences in psychological adaptation and coping in parents of pediatric cancer patients. *Psycho-Oncology*, **7**, 26-36.

神村栄一 1996 ストレス対処の個人差に関する臨床心理学的研究 風間書房

神村栄一・海老原由香・佐藤健二・戸ヶ崎泰子・坂野雄二 1995 対処方略の三次元モデルの検討と新しい尺度 (TAC-24) の作成 *教育相談研究*, **33**, 41-47.

加藤司 2001 コーピングの柔軟性と抑うつ傾向との関係 *心理学研究*, **72**, 57-63.

日下部典子・千田若菜・陳峻文・松本明生・筒井順子・尾崎健一・伊藤拓・中村菜々子・三浦正江・鈴木伸一・坂野雄二 2000 コーピング尺

- 度の開発とその信頼性の検討に関する展望 ヒューマンサイエンスリサーチ, **9**, 313-328.
- Lazarus, R.S. 講演 林俊一郎 (編訳) 1990 ストレスとコーピング—ラザルス理論への招待— 星和書店
- Lazarus, R.S. 1991 *Emotion and adaptation*. London:Oxford University Press.
- Lazarus, R.S. 1993 Coping theory and research : Past, present, and future. *Psychosomatic Medicine*, **55**, 234-247.
- Lazarus, R.S., & Folkman, S. 1984 *Stress, Appraisal, and Coping*. New York:Springer.
- McCubbin, H.I., McCubbin, M.A., Patterson, J.M., Lauble, A.E., Wilson, L.R., & Warwick, W. 1983 CHIP—Coping Health Inventory for Parents : An Assessment of Parental Coping Patterns in the Care Chronically Ill Child. *Journal of marriage and the family*, **45**, 359-370.
- McCubbin, H.I., Thompson, A.I., & McCubbin, M.A. 2001 FAAN 2001:Family Measures: Stress, Coping and Resiliency. Kamehameha Schools, Honolulu, Hawaii.
- Parker, J.D.A. & Endler, N.S. 1996 Coping and Defense:A Historical Overview. In Zeidner, M & Endler, N.S. (Eds.) *Handbook of Coping*. New York:John Wiley & Sons. Pp. 3-23.
- ラザルスR.S.・フォルクマンS. 本明寛・春木豊・織田正美 (監訳) 1991 ストレスの心理学 実務教育出版
- 坂田成輝 1989 心理的ストレスに関する一研究—コーピング尺度 (SCS) の作成の試み— 早稲田大学教育学部 学術研究 (教育・社会教育・教育心理・体育学編), **38**, 61-72.
- Sanderman, R. 1988 *Life events, Mediating Variables and Psychological Distress:A Longitudinal Study*. (University Press RUG, Groningen, Dissertation)
- Schreurs, P.J.G., Willige G van de, & Tellegen B. 1988 *Utrecht Coping List:A Manual [Dutch]*. Lisse:Swets en Zeitlinger.
- Schwarzer, R. & Schwarzer, C. 1996 A Critical Survey of Coping Instruments. In Zeidner, M & Endler, N.S. (Eds.) *Handbook of Coping*. New York:John Wiley & Sons. Pp. 107-131.
- Selye, H. 1956 *The Stress of life*. New York: McGraw-Hill. Pp. 52-74.
- セリエH. 杉靖三郎・田多井吉之介・藤井尚治・竹宮隆 (訳) 1988 現代社会とストレス 法政大学出版局
- Stanton, A.L., Danoff-Burg, S., Cameron, C.L., & Ellis, A.P. 1994 Coping Through Emotional Approach:Problems of Conceptualization and Confounding. *Journal of Personality and Social Psychology*, **66**, 350-362.
- 鈴木伸一・神村栄一 2001 コーピングとその測定に関する最近の研究動向 ストレス科学, **16**, 51-64.
- 鈴木伸一・嶋田洋徳・神村栄一 2000 ストレス対処行動測定尺度の階層構造 日本健康心理学会第13回大会発表論文集, 154-155.